

〔研究ノート〕

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの思想（1）

——「ユートピアの声」シリーズを読む——

土 居 充 夫

<はじめに>

2022年2月に始められた第2次ウクライナ戦争は、本稿完成時点（2024年12月末）で、解決の兆しは見えない。

「講和」は無論、「停戦」の展望すら不透明な状況で、せめて今回の戦争について理解を深めようと読書が続ける中で出会ったのがスヴェトラナ・アレクシエーヴィチの5冊から成る「ユートピアの声」シリーズであった。読み終えて、どの著作も読者の目を開かせ、考えさせる点が多々ある秀作であるとの印象を持った。ロシア語を全く解しない筆者は、邦訳書に頼るしかなく、その点で研究論文を著すには大きな欠陥がある。がしかし、本シリーズには価値があると確信しているので、アレクシエーヴィチの著作と思想について、「研究ノート」の形で筆者の勉強したことを以下に記そうと思う。

拙稿は2部構成となっている。第1部は、「ユートピアの声」シリーズ5部作のそれぞれの紹介である。これらの著作は「証言記録文学」なので、筆者による紹介においても、筆者の理解の根拠を示すべく数多くの証言を引用している¹⁾。その際、証言者の多様性が少しでも感じられるように、わかる範囲で戦時中の肩書、性別、年齢などを記している。さらに、必要に応じて、アレクシエーヴィチの経歴がよく分かり、彼女の思想が彼女自身の言葉で語られている『アレクシエーヴィチとの対話』から援用している。第1部は、拙稿の本論である第2部の主張の根拠となる資料を提供している。第2部では、アレクシエーヴィチの思想が対象である。最初に、「自由」「愛」「小さき人々」といったキーワードに焦点が当てられ、彼女の思想が考察されている。その後、彼女に刺激を受けて思いついた筆者の今後の研究課題について、紙幅の許す範囲で論じられている。

第1部. 「ユートピアの声」シリーズ5部作

0. スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの略歴

アレクシエーヴィチは、ベラルーシ人の父、ウクライナ人の母の下、1948年当時ソ連領だったウクライナに生まれた。軍人だった父は「独立意識が強かったウクライナでは差別

1) 引用に際して、不自然にならない範囲で漢数字をアラビア数字に変換した。また、ルビは省略した。

され疎外された」ようで、「生活の先行きを憂えた母が、遠く離れて暮らす祖母にアレクシエーヴィチを預けることにした」。アレクシエーヴィチは「祖母と数年間過ごした」後、一家でベラルーシに移住した (B-1: p 83f.)。成長したアレクシエーヴィチは「ベラルーシ国立大学ジャーナリスト学科に学び、[1972年の] 卒業後ベラルーシでジャーナリストとして仕事を始めた。…しかし、執筆に使うのはロシア語である」(沼野充義解説。A-2: p 350)。ここから想像できるように、彼女はウクライナ、ベラルーシ、ロシアの3つの文化的影響のもとに育った。2015年のノーベル賞受賞講演では「私には家が3つあります。私のベラルーシの大地は父の故郷で、私がこれまで住んできたところ。ウクライナは母の故郷で、私が生まれたところ。そして偉大なロシア文化なくして今ある自分を想像することはできません」と語っている (B-1: p 22)。

ロシア文化のなかでとりわけドストエフスキーの影響を強く受けたようで、「ドストエフスキーは私を育ててくれた作家なんです」「私の人生の師ともいえるのはドストエフスキーです」と話している (B-1: p 32, p 351)。アレクシエーヴィチは、アレーシ・アダモヴィチらによる証言集『燃える村から来た私』(1975年)に衝撃を受けて、戦争をテーマとした「証言記録文学」に取り組むことになるが、「小さき人々」を対象とした点および手法として「ポリフォニー」を用いた点で、ドストエフスキーの強く大きな影響を受けている。

最初の作品『戦争は女の顔をしていない』(1984年)は、大祖国戦争で戦地に赴いた女性たちの証言から成っている。その後、アフガン戦争、チェルノブイリ原発事故、ソ連崩壊・体制転換とテーマを広げ、「証言記録文学」として「ユートピアの声」シリーズ5部作を「完成」させることになる。

1. 『戦争は女の顔をしていない』(1984年)

戦後生まれとはいえ、アレクシエーヴィチにとって戦争は身近なものであった。まず、多くの親族が戦争で亡くなっていた。「母の父親であるウクライナ人の祖父は戦死して、ハンガリーのどこかに葬られており、ベラルーシ人の祖母、つまり、父の母親はパルチザン活動に加わり、チフスで亡くなっている。その息子のうち2人は戦争が始まったばかりの数ヶ月で行方不明になり、3人兄弟の一人だけが戻ってきた。それがわたしの父だ」(A-1: p 2) というのである。彼女が「子供時代を過ごした村は女しかいなかった」(A-1: p 3)。多くの男たちが戦争で亡くなったからである。(ちなみに、大祖国戦争の最前線となり、一時期ドイツ軍に占領された「ベラルーシでは…4人にひとりが前線やパルチザンで命を落とし」た (B-1: p 2)。

「本の虫だった」アレクシエーヴィチは、現実を知り、表現したいという強い欲求を持っていた。ジャーナリストとして働いていたある時、アレーシ・アダモヴィチ他の共著『燃える村から来た私』を読んで「ショックをうけた」。これは、ナチスドイツによって村々が焼き払われた際「奇跡的に生き残った農民」たちによる証言を集めた作品である。「師となった」アダモヴィチに倣って、大祖国戦争について調査・研究を始めたアレク

シエーヴィチは、その過程で「わたしたちが戦争について知っていることは全て『男の言葉』で語られていた。わたしたちは『男の』戦争観、男の感覚にとらわれている」（A-1：p4）ことに気づいた。そこで、戦地で活動した経験のある500人を超える女性たちに話を聞くことにした。それをポリフォニーの手法で作品化したのが本書『戦争は女の顔をしていない』である。

①女の観点から見た戦争

女の観点から見た戦争は男のそれとは異なっている。女たちの多くは自ら志願して戦地に赴いた。その内の少なからぬ部分が愛国心教育に影響されて従軍したのだが、残虐な行為をしたドイツ兵が相手であっても殺すことを嫌がった（でも兵士なら殺さざるを得なかった）。ドイツ兵捕虜にパンをやったり、戦場で傷ついたドイツ兵を助け出したりもした。また戦争の被害者として生きとし生けるすべてのものを含めた。男たちが思想に捉われ、祖国を守るための英雄的な戦いを語るのと対照的であった。例えば、『『敵と言ったって人間だわ』…。両手が震え始めて、全身に悪寒が走った。恐怖のようなものが…。今でも、眠っているとき、ふとあの感覚がよみがえってくる…。…私の中で何かが抵抗している。どうしても決心できない。私は気を取り直して引き金を引いた。彼は両腕を振り上げて、倒れた。死んだかどうか分からない。そのあとは震えがずっと激しくなった。……これは女の仕事じゃない、憎んで、殺すなんて。自分自身を納得させなければならなかった」（兵長・狙撃兵。A-1：p 51f.）。「捕虜の中に一人の兵士がいた…。少年よ…。……私はパンを一個とって半分に割ってやり、それを兵士にあげた。その子は受け取った…。受け取ったけど、信じられない…。…私は嬉しかった…憎むことができないということが嬉しかった。自分でも驚いたわ…」（二等兵・衛生係。A-1：p 129）。「味方の負傷兵を引きずりながら考えた。…このまま置き去りにしたら出血多量でそのドイツ人は死んでしまう。あたしはその人の所に這って行った。負傷者を2人とも交互に引きずっていったよ」（赤軍伍長・衛生指導員。A-1：p 482）。あるいは、「村が焼かれるのを見たことがあります。……人々が泣き叫ぶ声、牛、鶏、何もかもが人間の言葉を叫んでいるように聞こえました。生きとし生けるものがみな、焼かれながら、泣き叫んでいる…」（パルチザン・連絡係。A-1：p 380f.）。

念のために言えば、男女の感性を二分化する単純な図式には収まらない事実がある。ドイツ兵との関係を例にとると、「2人のドイツの捕虜がどこからか近寄ってきて食べ物にくれと言います。私たちはパンを持っていたんです。分けてやると、粥を炊いている兵隊たちが非難しているんです。……「ところが、その」兵士たちはお粥に塩漬けの脂身を加えて、缶詰の空き缶に入れてやりました」（大尉・軍医。A-1：p 336）。「私の病室には負傷者が2人いた。ドイツ兵と味方のやけどした戦車兵が。そばに行って、『気分はどうですか』と訊くと、『俺はいいが、こいつはだめだ』と戦車兵が答えます。『でも、ファシストよ』『いや、自分は大丈夫だ。こいつを…』あの人たちは敵同士じゃないんです。…2人の間には何か人間的なものが芽生えていきました。こういうことがたちまち起きるのを何度も眼にしました」（A-1：p 207）。男女の違いはアレクシエーヴィチにおいてあくまで

傾向として（あるいは理念型として）捉えられていると考えるべきだろう。そもそも単純な二分化とポリフォニーという手法は相容れないのではないか？

②従軍女性への差別

「ソ連では第2次世界大戦で100万人を超える女性が従軍し、パルチザン部隊や非法の抵抗運動に参加していた女性たちもそれに劣らぬ働きをした」（訳者あとがき。A-1：p 483）。男たちに伍して戦った彼女たちは、自らの経験について口を閉ざした。なぜか？ 澤地久枝は、その背景に男性優位社会・国家中心主義があると見ている。曰く、「1人ひとりの証言のむこうに、男性支配の社会があり、国がある」（澤地久枝解説。A-1：p 496）。

戦地では、若い女の子たちを預かることになった隊長や上官は、当初困惑立腹した。やがて彼女たちが男たちに劣らぬ（それどころか男以上の）能力・精神力を発揮することを認めたものの、それでも困惑は残ったようである。ある証言によれば、「指揮官…は私たちを見て、『娘っこを押しつけられちゃった。民族舞踊団じゃあるまいし。戦争なんだ、…』と腹を立てた。でもそのあとで私たちを呼んでお昼をごちそうしてくれたの。『お茶うけに甘い物はないか？』なんて副官に訊いてるの。……射撃とカムフラージュをやってみせることになった。前線から呼び戻されて射撃を2日間習った男たちより私たちのほうが上手だった。……こんなに上手にカムフラージュできるなんて信じられなかったみたい。『女の子扱いした言葉は取り消す』と言ったわ。でもやはり、悩んだみたい。なかなか私たちに慣れなかった」（兵長・狙撃兵。A-1：p 49f.）。

また女性の存在自体が男たちを元気づけた。例えば、「歩兵部隊にも女の子がいたが、その中の一人でも姿を現すと私たちはしゃきとしたものだった。わかります？…戦地で女たちの笑い声が聞こえるのがどんなにありがたかったか。女の声は」（A-1：男性 p 162）、「前線で女性を見れば男たちの顔は直ちに変わったわ。女性の声聴いても、変身した。あるとき私は土壕のそばに腰を下ろして小さな声で歌い始めたの。みんな眠っていて誰も聴いていないと思ったんだけど、朝、指揮官が言いました。『俺たちみな眠っていません。女の声が恋しくてたまらなかったから』と」（騎兵中隊・衛生指導員。A-1：p 242）、「戦後何年もして、ある男の人に『あなたの若々しい微笑みを憶えていますよ』と告白されたことがあります。私にとってその人は何人もいる負傷者の一人にすぎず、憶えてもいませんでした。でも、その人は私の笑顔が彼を再び生きる気にさせたと言いました。あの世から引き戻したのだ、と。女のがんが…」（上級中尉・外科医。A-1：p 346f.）。

にもかかわらず、戦後、この女性たちは忘れられた。だからこそ、お客にきた元参謀本部の上官のある女性は激しくなじったのである。「立派だとか、尊敬とか言ってるけど、女たちはほとんど全員が独身のままよ。結婚していない。共同住宅に住んでいるわ。誰が彼女たちを哀れんでくれた？守ってくれたの？どこにあんたたち隠れてたの？裏切り者！」（軍曹・高射砲指揮官。A-1：p 186）。もちろん結婚した従軍女性はいるし、従軍者同士で結婚している例もある。しかし、次のような離婚例もある。「私の司令官が復員してきました。私のところに来て、私たちは結婚しました。1年後、彼は他の女のところに行ってしまいました。私が働いていた工場の食堂の支配人のところへ。『彼女は香水の匂

いがするんだ、君は軍靴と巻き布の臭いだからな』と」（軍曹・射撃兵。A-1：p 351）。「結婚は早かったんです。戦後一年です。私が働いていた工場のエンジニアと。……私が[障害を持つ]女の子を産んだ時、彼はしげしげと眺めて、すこし一緒にいたんだけど、非難の言葉を残して出て行ったんです。『まともな女なら戦争なんか行かないさ。銃撃を覚えるだって？だからまともな赤ん坊を産めないんだ』（狙撃兵。A-1：p 368f.）。

戦時中にある大尉が放った言葉がおそらく、男の見方を典型的に表している。「『いやあ！誰だって君らをかわいいと思うさ。だが戦争が終われば君らとは結婚はしないだろうな。その腕で皿なんか投げられたら命とりだ』（上級軍曹・狙撃兵。A-1：p 58）。つまり、戦地ではその女性性で男たちを慰め、共にナチスドイツと戦った逞しい戦友である女性たちは間違いなく魅力的である。しかし、平時時に男が女に求める魅力はまた別物なのである。

さらにつらいことに、祖国に戻った彼女たちは、同性の女たちから侮辱・敵視された。曰く、「祖国でどんな迎え方をされたか？……女たちはこう言ったんです。『あんたたちが戦地で何をしていたか知ってるわ。若さで誘惑して、あたしたちの亭主と懇ろになってたんだろ。戦地のあばずれ、戦争の雌犬め…』ありとあらゆる侮辱を受けました…」（狙撃兵。A-1：p 367）あるいは、「村に戻ったとき、…4日目の朝、母が起こすんです。『あんたのために荷物を用意してやったよ。出て行っておくれ。まだ妹が2人いるんだ。あんたの妹じゃ、だれもお嫁にもらってくれないよ。あんたが4年間というものの戦争に行っていた、男たちの中にいたってことをみんな知っているんだよ』って」（A-1：p 35）。「彼のお母さんが台所へ息子を呼び出して泣いているの。『なんだって戦場の花嫁なんかを？おまえは妹がまだ2人いるのに、もう貰い手はないよ』（赤軍伍長・衛生指導員。A-1：p 477）。

彼女たちの多くは、先に記したように、自ら志願して戦地に行った。それも多くの場合母親の反対を押し切って。しかしながら、それは愛国心をかき立てる教育と情報政策によるところが大きい。「『わたしを戦線に送ってください』と軍に懇願の手紙を出したわ。わが国では私たち自身が関わらないですむことは何もない、国を愛するように、国を誇りに思うようにと、そう教え込まれていたんです」（軍曹・高射砲兵。A-1：p 299f.）。「母は父と一緒に私を行かせまいとしました。でも、私の思いはただ一つ。前線へ、前線へ、でした。今は博物館入りしてしまった、あのポスターよ。『母なる祖国が呼んでいる！』『君は前線のために何をしたか？』少なくとも私にはとても大きな影響を与えたわ。…歌だってあったでしょ？『立ち上がれ！広大な国よ…決死の戦いに立ち上がれ…』（軍曹・親衛隊・航空整備士。A-1：p 69f.）。「小さい頃から『少女たち、トラクターの運転を！』『少女たち、飛行機の操縦を！』という呼びかけを聞き慣れていました」（軍曹・狙撃兵。A-1：p 73）。

「ソ連の従軍女性たちは15歳から30歳で出征していった」という（訳者あとがき。A-1：p 484）。とりわけ十代は純粋で教育宣伝の効果をまともに受けやすい。その結果として従軍したにもかかわらず、男たちには「裏切られ」、女たちからは侮辱され、国家からは十

分なサポートを受けられなかったのである。

③検閲

本書を検閲した検閲官はアレクシエーヴィチに対し次のように語っている。「あなたは戦争の汚さばかりを見せようとしている。何をねらっているんです？真実が現実にあるものだと思ってるんですか？……真実というのは我々が憧れているものだ。こうでありたいと願うものなのだ」(A-1：p 28f.)、「そんなことは嘘だ。これは、わが軍の兵士に対する、ヨーロッパの半分を解放したわが軍に対する中傷だ。わが国のパルチザン、わが英雄的国民にたいする中傷だ。あなたの小さな物語など必要ない。我々には大きな物語が要るんだ。勝利の物語が。あなたは誰に対しても愛情がない。わが国の偉大な思想を愛しておられない。マルクスやレーニンの思想を」(A-1：p 32)。検閲官が検閲・削除し、アレクシエーヴィチ自身も削除した。それでも出版社は出版を嫌がった。「原稿はずっとまえから机に載っている。出版社に断られ続け、雑誌社も黙っている。拒絶の理由はいつも同じ——あまりに恐ろしい戦争だ、悲惨すぎる、生々しすぎる。共産党が指導的にリーダーシップを見せている部分はどこにあるんだ？」(A-1：p 18f.)。要するに、共産党の指導の下理想社会を目指しているソ連国家、その国家をナチスドイツの侵略から守った大祖国戦争での英雄的な戦い、そうしたイメージに合わない本の出版を当局のみならず出版界も嫌がったわけである。

検閲官や出版界の指摘に該当しそうな証言を紹介する。戦争の悲惨さについては、「白兵戦です……これは本当に恐ろしい……人間のやることじゃありません。なぐりつけ、銃剣を腹や眼に突き刺し、のど元をつかみあって首をしめる。骨を折ったり、呻き声、悲鳴が渦巻いています。頭蓋骨にひびが入るのが聞こえる、割れるのが……。突撃のあとは顔を見ない方がいいんです。だって、それはまったく別の顔ですもの。普通、人間が持っている顔じゃないんです。……少し異常で、獣に似ているんです。……砲弾が火薬庫に命中して、…火薬庫の警備をしていた…兵士が燃え上がった。それはもう黒い肉切れ。それが、その場で跳ねているんです。…私はシーツをひっつかんで駆けつけるとその兵士の上に覆い被さって伏せた。地面に押しつけたの。土は冷たかったから。…その兵士はピクピクしていましたが、心臓が破裂して、静かになりました…」(歩兵中隊・衛生指導員。A-1：p 216f.)。「応援に来てくれた〔水兵たちの〕ほとんどが地雷に吹き飛ばされた。…その水兵たちは吹き飛んだまま太陽に照りつけられていた…遺体はふくれあがって、水兵の縞シャツのせいで、スイカみたいだった」(騎兵中隊・衛生指導員。A-1：p 240)。

ロシア兵やパルチザンの実態については、「ドイツに入って最初の村々……ドイツ娘たちを捕まえることにした。10人で1人の女性を暴行した。…12、3歳の少女たち…。唯一恐れていたのは、味方の女の子たちがこれを知ってしまうことだった。わが軍の看護兵たちが。彼女たちに対しては恥ずかしかった…」(A-1：p 29)。「昼間はドイツ軍や敵側についた警察官が怖かったし、夜はパルチザンがくるのが怖かった。あたしの最後の雌牛はパルチザンに取り上げられて、残されたのは1匹の猫だけ。…あたしはその人たちについて…10キロぐらいも行ったでしょうか。返してちょうだいと哀願しました。小屋では3人

の子供が待っているんです…」(A-1：p 34)。パルチザン（と党）の実態を明らかにするために、別の場でアレクシエーヴィチが語った言葉を追加しておこう。「ある夜、パルチザンが彼女の家にやってきて、最後に残されていた唯一の牛を奪ってゆこうとしました。その牛は命の綱でした。食糧がないなか、彼女はその牛の乳で小さな子供2人を育ててきたからです。『牛を渡さなければ銃殺する』とパルチザンは脅迫しました。彼女が泣いていると1枚の引換証を渡し、『戦争が終わったら当局に申し出よ。牛は返す』と言いました。牛を奪われ、2人の子供は間もなく死んでしまったそうです。戦後、彼女は…地区の共産党委員会書記を探して訪ねました。…相手は笑いながら、『おかあちゃん。誰も牛なんて返さないよ。その紙がいったい何だって？』と言ったということです。戦後の国家の歴史では、パルチザン闘争をした共産主義者たちは、『我々は勝利した』と言いました。しかし、それは、誰よりも苦しみを味わった人々から奪った勝利、盗み取った勝利だったのです」(B-1：p 77)。

スターリン批判については、「有名なスターリンの命令227号があったんです。『一步もひいてはならない！』後退したら銃殺だ！その場で銃殺。でなければ軍事法廷か特設の懲罰大隊に入れられる。そこに入れられた人は死刑囚と呼ばれていた。包囲から脱出した者や捕虜で脱出したものは選別収容所行き。私たちの後は阻止分遣隊で退路が断たれていたんです。味方が味方を撃ち殺す……こういう光景が私の記憶にあります……若者が…『銃殺しないでくれ』と哀願しています。…額に一発。ピストルで。見せしめの銃殺——ちょっとでもびくついた者は誰でもこういうことになるという。ただの1分でも。ほんの1分でも」(上級軍曹・斥候。A-1：p 85f.)。あるいは、「戦争がまだ終わらないうちから、列車がすでに次々にマガダン〔オホーツク海岸の町。流刑地〕へ送られていました。捕虜になっていた人たち、ドイツの収容所を耐え抜いてきた人たちが逮捕されたんです。その人たちはヨーロッパを見てきてしまった人たちで、ヨーロッパの人たちがどんなふうに暮らしているかしゃべってしまうかもしれませんでした。ヨーロッパでは共産主義者なしで暮らしていて、どんな家に住み、どんな立派な道路があるかを。そしてコルホーズなどどこにもないことを。勝利を得た後、みんな沈黙してしまいました。黙りこくって、戦前と同じように恐怖にとらわれていたのです」(A-1：p 39)、「[一時期捕虜になっていた夫に対して]『ソ連の将校は降伏しない、わが国で捕虜になった者はいない、生き残った者は裏切り者だ』『どうして生きてやがる！どうして生き残った！』……夫は7年たって〔強制収容所から〕戻ってきた……。私は沈黙することを覚えた…どんな身上調書にも必ずある質問、『身内に捕虜だった人がいますか？』。学校の用務員として採用してもらえなかったわ。私はその欄に記入したから」(パルチザン・連絡係。A-1：p 439f.)。

結局、本書は完成してから2年間出版できなかった。しかし、「ゴルバチョフのペレストロイカが始まった」ら「すぐさま出版され」た。その上、「毎日のように何十通もの手紙が来て、わたしのファイルはふくれあがった」(A-1：p 20f.)。それまで黙っていた従軍女性たちが語りたがったのである。その結果、三浦みどりが2008年に群像社から邦訳書を出した際底本とした「2004年の最終稿ではペレストロイカ直後ではまだまだ語れなかった

ことが加わっ」た。「仲間を殺さなければならなかった時のこと、ソ連軍の男たちがドイツの女性に何をしたか、そして、戦争が終わると直ちに占領地で暮らしていた捕虜であったという経歴のせいで国賊扱いされ極北の地に流刑されたことなど」(訳者あとがき。A-1: p 485f.) が新しく付け加えられたのである。

2. 『ボタン穴から見た戦争』(1985年)

本書は、執筆の経緯から見ると、『戦争は女の顔をしていない』とセットで考えられる。というのも、「その [= 女性たちの] 取材中に、アレクシエーヴィチは大人とはまた違った位置から戦争を見つめていた子供たちの眼に気づく。子供の時の記憶はもっと繊細で鋭く耳をつんざく悲鳴のようだった。子供たちの戦争体験を伝えなければならないと感じた彼女は、ナチス・ドイツの白ロシア侵攻当時、0歳から14歳の子供だった人たちを『戦争孤児のクラブ』『孤児院育ちの人々の会』などで次々とたどって行き、子供の眼に映った戦争を記録した」(訳者あとがき。A-2: p 343), その結果生まれたのが、ベラルーシの子ども101人の証言から成る本書『最後の証人たち』だからである。ちなみに、邦訳の書名『ボタン穴から見た戦争』は、「私はオハネでしたから、…地面に伏せて、頭からオーバーをかぶっていても、爆弾が落ちる様子をボタン穴から見ていました。初めて死人を見るまではそうだった…」(A-2: p 51) という当時10歳の女の子の証言に由来している。

本書において、アレクシエーヴィチは反戦の立場を明らかにしている。曰く、「[かつての子供たちに] 語ってもらわなければなりません。なぜなら、今でもどこかで爆弾が炸裂し、弾丸がうなりをあげ、家々が木っ端みじんに爆破され、吹き飛ばされた子供用ベッドが破片と一緒に空から落ちてくるのですから。なぜなら、大戦争を起こしたい、広島の大惨劇を世界中で起こしたいと望む者が、原子力の炎のなかで、子供たちを水滴のように蒸発させ、花のように無惨に干からびさせることをまたもや欲する者がいるのですから…」(A-2: p 2)。

本書には、ナチス・ドイツの残虐な行為が次から次へと出てくる。例えば、「カーチャおばさんの言葉を今も憶えている。『やつらは兄さんの頭を割ったのよ』あたしは手でその脳を集めたんだもの、気味が悪いほど白かったわ』1日のうちにおばさんの髪は真っ白になった」(8歳女子。年齢は1941年当時。以下同様。A-2: p 33)。あるいは、「通訳が訳した。『将校殿はパルチザンと連絡がある者の名前をあげろと命じています。黙っていれば、全員射殺する』……前の方にいた人たちから14人数え出された。スコップを渡され、穴を掘らされた。……3人ずつ銃殺された。穴のふちに立たされて、至近距離で撃たれる。他の者たちは見ていた…。…14人が銃殺され、穴に埋められた。僕たちはまた突っ立って見ていた、土をかぶせ、長靴で踏み均すのを。その上からきちんとなるようにスコップでぺたぺたたたく。角を切り取ったりして、形を整えすらした。中年のドイツ人が咳払いをして、まるで野良仕事でもしたように、顔の汗をハンカチでぬぐっていた」(12歳男子。A-2: p 69f.)。「まず子供たちが撃ち殺されるのを見たんです。撃ち殺して、親たちがそれを見て苦しむのを観察しているんです。わたしの2人の姉と2人の兄が殺されました。子

供たちを殺してしまってから、親たちに移りました」（15歳女子。A-2：p 135）。

子供たちはまた、労働奴隷として利用された。「ドイツに子供たちを連れていく選別が始まりました。年齢でなく、身長で選ぶのです。……年老いたドイツ人が近寄ってきて、私と他に３人の女の子を選び出し、……すぐに野良へ出されました。鋤や種まき機の刃をいためないために石ころを拾う仕事です。……私たちは、木の足枷をつけられて、足はまめだらけでした」（11歳女子。A-2：pp 98-100）。あるいは輸血用の血を提供する者として利用された。「数人のドイツ人がバラックをまわって、子供たちの調査をし、かわいらしくて金髪の子供たちだけを選び出しました。……妹は朝連れて行かれて、夕方帰ってくるのですが、日に日にやつれていくんです。…あとになって、子供たちは血を取られていたのだと分かりました」（7歳女子。A-2：p 114）。この証言だけではわかりにくいですが、アレクシエーヴィチの原稿の清書をしていたタイピスト——彼女は「戦争中、両親を失って孤児院に入っていた」——が、「ドイツ人たちの目的は、子供たちの血を抜くことだったんです。子供の血は、傷ついた兵士を治すのにとても役立つんだと言っていました」と話している（B-1：p 79f.）。

非人間的な残虐な行為をされながら、女性たちは、ドイツ人捕虜に対して憎しみを超えた対応をすることがあった。例えば、「私はライフルを与えられて、10人のドイツ人捕虜を仕事にひき立てていきました。初めて連れていった時には、女たちが取り囲みました。手に手に石やシャベル、箒を持っています。…『だめよ！手をださないで…この人たちは私が責任を持たされているのよ…発砲するよ！』そして、空に向けて撃つのでした。女たちは泣いていて、私も泣いています」（9歳女子。A-2：p 131），あるいは、「戦後……。お母さんはジャガイモを運んでいた。働いていた工場で少しもらってきたんだ。建設現場からドイツの捕虜が近づいてきた。『お母さん、どうか、ジャガイモを』お母さんは言った。『あげるものか。お前がうちの息子を殺したのかもしれないだろ？お前は人殺しだよ』ドイツ人はどぎまぎして黙ってしまった。お母さんは先に進んだのだけれど、あとで戻って行ってジャガイモをいくつか取り出すとドイツ人にあげた」（14歳男子。A-2：p 315f.）。

3. 『亜鉛の少年たち』（1991年。増補・改訂版2013年）

「アフガニスタン戦争が始まってから7年が過ぎた1986年」、アレクシエーヴィチは友人に誘われ、アフガン戦死者の葬儀に参列した。そこである遺族の女の子の態度に心を動かされ、「私はこの沈黙の密約に加わりたくない。加わってはならない」と強く思った。先の2冊で戦争について著すことに疲れ切っていたアレクシエーヴィチは、三たび証言を集め始めた。1988年には「取材派遣団の一員として」アフガンに赴き、戦地の実態を知った。その結果、兄弟国を助ける国際的義務の遂行＝正義の戦争という幻想から醒めた。曰く、「私にとって戦争とは、凶悪な殺人以外の何物でもなくなりました。戦争の神話の呪縛を解かれ、私は本当に自由な人間になって戻ってくることができました」（B-1：pp 106-10）。

本書は、アフガン戦争によって翻弄された少年たちと母たちの証言を素材とした作品で

ある。アフガン戦争批判の立場を鮮明にしているアレクシエーヴィチのねらいは、アフガン戦争の本質・実態を知ることによって少年たち、母たち、そして読者が「自由な人間」になることと思われる。そして、「自由な人間」になることは、深く傷ついた少年たち（や母たち）が自らを回復すること、傷ついた母子関係が修復することを意味するであろう。ちなみに、アレクシエーヴィチは、『亜鉛の少年たち』という「タイトルにふたつの意味を込めた」と言う。「ひとつは、文字通り、少年兵が『亜鉛の棺』となって帰ってきたから。もうひとつの意味は、彼らの心が殺され、精神が金属の鉛のようになってしまったと思ったから」である（B-1：p 122）。

①アフガン行きの経緯・動機

分類はポリフォニーという手法に合わない気もするし、自主的—他律的とはっきり分けられないケースが実際には多いかもしれないが、一応試みてみた。ちなみに、後のチェチェン戦争における次のような証言がある。『「ママ、わたしは行くの。もう上申書を書いたんだもの」…『ママ、行かないとクビになっちゃうの、ママだって知ってるでしょ。わたしたちの国ではいつも、表向きは志願だけれど実際には強制なんだから』』（チェチェンで怪死した女性警察伍長の母親。A-5：p 532）。

i. 自ら志願

a. 大義を信じて

兄弟国の社会主義建設を援助するという大義を信じてアフガンに行った少年たちがいる。例えば、「自分から、アフガンの革命運動を支援するために行かせてくれと頼んだ。当時は新聞でもテレビでもラジオでも、革命って報道されてた…。中東に赤い星が光りだした！我々は彼らを支援し、兄弟に肩を貸さなければならない…」（兵卒・狙撃兵。A-3：p 260）。しかしながら、自らの正義を信じ、文化の違いに無頓着・無理解なソ連兵は侵略者と見なされた。「俺は店の主人に話してみた——。『そんな生き方は間違ってる。俺たちはそれを教えにきたんだ。一緒に社会主義を作っていこう』でも店主は微笑んで、こう返す——『私は革命〔1978年4月〕前からずっとこうして店を営んできた。故郷に帰りなさい。ここは私たちの山だ。私たちには私たちのやりかたがあるんだよ……』カブールの街を通れば、現地の女たちが俺たちの戦車に木の枝や石を投げつけてくる。子供たちは流暢なロシア語で罵倒してきて、『ロシア人は帰れーっ』って叫ぶ」（兵卒・通信兵。A-3：p 93）。「新たな政府が土地を分け与えれば、人びとは喜んで受けとるだろうと思っていた。それなのに予想に反して…農民は土地をもらいたがらない。『大地はアッラーのものだ』のに、それを与えようだなんておまえらは何者だ。人はアッラーの御心のままに大地に恵まれているのだ』ときやがる。俺たちがMTS（機械トラクター共有組織）を作り、農民にトラクターやコンバインや草刈り機を与えれば、生活はぐんと向上し、人々も変わるだろうと思っていた。それなのに予想に反して…人々はMTSを破壊していく。まるで戦車を破壊するみたいに、ソ連のトラクターは爆破された」（兵卒・砲兵。A-3：p 287）。

b. 自分探し・冒険・自分の成長

若者らしくというか、自分探しのため、あるいは冒険・自分の成長を求めて志願した者

もいる。「俺は自分から志願して戦争に行った……現地ではみんな仲が良くて、兄弟みたいなものなんだと思っていた。そういう体験をするために行ったんだ」（兵卒・迫撃砲兵。A-3：p 98）。「自ら志願した。……自分になにができるのかを試してみたかった。…大学に通っていたが、大学じゃ自己主張もできなければ自分が何者なのかもわからない。英雄になりたかったし、そういう機会を探していた」（歩兵小隊長。A-3：p 134）。「私はモスクワ育ちの文学少女でした。ほんとうの人生とは、どこか遠くにあるもののような気がしていました。そして現地の男たちはみんな強くて女はみんな美しく、冒険に満ちていると。慣れ親しんだ日常から飛び出して行きたかったんです…」（女性・補助員。A-3：p 139）。

ii. 他律的に

他律的にアフガンに行った経緯も、いくつかのタイプに分けられる。

a. だまされて

『まずは開拓地に行って、麦の収穫を手伝ってもらいたい』…。みんな行くって言ったよ。…着いた先は…[ウズベキスタンの] タシケントだった。……整列するとすぐに、俺たちは言い渡された——数時間後に迎えの飛行機が来る、それに乗ってアフガニスタンへ赴き、軍務を果たすこと。宣誓を守ること。大騒ぎになった。……逃げ出そうとする奴らや、将校に喧嘩をふっかける奴らも出てきた。でも陣営は自動小銃を持った兵士たちに包囲されていて、そいつらがみんなを飛行機のほうにじりじりと追いつめていく。そうしてまるで荷箱を放り込むみたいに、俺たちは空っぽの鉄機体の腹に詰め込まれた」（兵卒・運転手。A-3：p 52f.）。

b. （半）強制的に

「タシケントに連れていかれた……で、アフガンに行く者は志願書を書けって言う。…俺は書かなかった。なのに翌日には俺たちは食料と金を配られて車に載せられて移送地点に行かされた」（兵卒・狙撃兵。A-3：p 115）。「軍事委員部に呼び出されました——『アフガニスタンで看護師を募集しています。どうですか。給料は1.5倍。加えて金券もあります』…『ご検討ください』『学業を続けたいんです』『ご検討ください』と言っているでしょう。さもなくば大学に電話してあなたはコムソモール団員として相応しくないのではないかと申し上げなくてははいけませんね。国からの要請だというのに…』」（女性・看護師。A-3：p 241f.）。「俺たちが連れていかれたのは[ウズベキスタンの] サマルカンドだった……。練兵場に整列させられ、命令が読みあげられた——『国際友好の義務を果たすため、君たちをアフガニスタン民主共和国に派兵する。行きたくない者は2歩、前へ』。3人が2歩前へでた。隊長はそいつらのケツを膝で蹴って列に戻させた。『いまのは、君たちの士気を確認したのだ』と」（兵卒・偵察兵。A-3：p 300f.）。

c. 命令に従って——軍人の場合

「俺たちはアフガニスタンに派遣された最初の交代要員だった。理念などなく、ただ命令に従った」（大尉・砲兵。A-3：p 148）。「なぜ私が現地に行ったかですか。隊長に呼ばれて、『義務だ』と言われたんです。私たちはそうやって、なにをしなければいけないと言われ続けて育ってきたし、従うことに慣れていました」（女性・准尉・諜報部長。A-3：

p 265)。「職業軍人には独自の心理がある——正義の戦争かどうかなんて、大事じゃない。自分たちが派遣された先であればそれが正義であり必要な戦争だ。……軍隊において勝手な思念は許されない。隊に配属されたら、あとは号令に従うのみだ」(少佐・大隊長。A-3 : p 280)。

②戦地の実態——戦争の悲惨さ

アフガン行きの経緯は様々であっても、彼らを共通して待ち受けていたのは戦地の悲惨な現実であった。数ある証言からいくつか紹介する。「あなたは焼け焦げた人を見たことがありますか。…顔もわからない、目も、体もない……黄色っぽい硬い皮に蔽われた、ぐちゃぐちゃのなにかで……その皮の下から、悲鳴ともななんとつかない、獣の唸りのような声が聞こえて……。……手も足も失って砂地に横たわっていた幼い女の子は…まるで壊れた人形みたいだった。……地雷にやられると……体が吹き飛んでバケツ半分ほどの肉片しか残らないこともよくあった」(女性・看護師。A-3 : p 45f.)。「最初に負傷兵が運ばれてきたときは気が狂いそうになった。腕もない足もない塊がごろんと転がされて、息をしている。……頭に銃弾が当たると、脳みそが飛び散る——でも負傷者はその飛び散った脳みそを追いかけて、500メートルだって走る。限界を超えて。肉体の死が訪れるまでは走れる」(軍医。A-3 : p 101f.)。「戦闘が終わるとバラバラになった味方の死体をかき集め、装甲にへばりついた肉片をこそぎ取った。…どこに誰の足があり誰の頭蓋骨の欠片があるのかななんてとてもわからない…。ひょっとしたらほかの遺族のもとに送られるかもしれない」(兵卒・偵察兵。A-3 : p 303)。

③帰国後の苦しみ——「アフガン・シンドローム」

i. 親しい人や一般市民からの非難、誤解・無理解、軽蔑、敬遠・無視

こんなつらい経験をしたアフガン帰還兵は、一般市民から温かく迎えられはしなかった。妻や恋人から非難されることもあった。「1986年に休暇で戻ってきたとき、『おまえら、現地で日光浴をしたり魚をとったり荒稼ぎしてるんだろ?』って言われたよ。新聞はなににも書かないか、嘘をついてるかだった。テレビもそうだ」(少佐・山岳狙撃中隊長。A-3 : p 239)。「みんなが無関心で、俺たちはまともな仕事には就かせてもらえない……。仕事でバリバリ活躍してる奴が、説明してくれたことがあった——『君たちになにができるかといえば、銃を撃つことしかできない……。知識はといえば、ピストルを持って祖国を守ることでとか、正義は武力でしか取り戻せないとか、そんなことでしかない』(軍曹・特殊部隊戦闘員。A-3 : p 325)。「帰ってきてから、うちで『ねえ、本物の「ドゥーフ」 [=アフガングェリラ] には会ったの?』と訊かれました。『こう、いかにも賊らしい顔つきをして、短剣を咥えてるんだろ?』って。『あるわよ。モスクワ工科大学を出た、若くて格好いい人だったけどね』と答えました。……『でもどうしてそんなに2、3昼夜も続けて働いたりしたんですか。8時間働いたら休むということもできたでしょう』と訊かれることもあります。『まさか! どういう状況だかわかってるんですか?』」(女性・看護師。A-3 : p 248)。「恋人……は肩に回された俺の手を押しのけて、『あなたの手、血まみれじゃないの』って」(兵卒・狙撃兵。A-3 : p 125)。

ii. 「アフガン・シンドローム」

アフガン帰還兵は、PTSD に苦しみ、何気ない日常の出来事に怯えたりして、日常生活を送ることが困難であった。「除隊になったあと、俺は大学に戻って寮で暮らした。…ドアをノックされるたびに、俺はアホみたいに飛びあがってドアの内側で身構えてしまう。雷が鳴ったり雨が窓を叩く音が響いたりすると、心臓が飛び出しそうになる」（兵卒・狙撃兵。A-3：p 121）。「公園を突っ切って歩くことができない——あたりを見回してしまう。カフェでウェ이터に背後から『ご注文は』と訊かただけで、飛びあがって逃げ出したくなる。…下劣な奴を見ると、『殺す！』としか考えられない」（兵卒・通信兵。A-3：p 231）。「俺はいまだに、舗装された道しか歩かない。アスファルトの上だけだ。森の小径へは足を踏み入れない…。草の上を歩くのが怖くてね…」（少佐・山岳狙撃中隊長。A-3：p 240）。「なにが『おはよう』よ！あなたまた叫んでたでしょ。そのあと殴りかかってきて、胴を押さえつけて」（軍曹・偵察兵。A-3：p 279）。「その日、俺はやかんとを焦がした……。焦げついてどんどん黒くなっていくやかんとを、ただ座ってじっと眺めてた。たまにそういうことがしたくなるんだよ。頭が現実から切り離されて、完全にどっかいっちゃまう。……〔帰宅した同棲中の彼女に〕『あのさ、血の匂いってわかるか？ 2、3 時間経つと、濡れた脇の下みたいな異臭になる。すげえ臭くてさ……。火の匂いのほうがいい…。』彼女はドアのカギを閉めて出ていった。それきり、もう 1 年も戻ってこない」（同上。A-3：p 277）。

アフガン帰還兵はまた、暴力に対する感覚が変わってしまった。実際に人を殺したケースもあった。「現地帰りの若者は集団になりたがる……。みんな騙されて、殺気立っている。自分のやりたいことを見つけたり、再び新たな倫理観を身につけたり、そういったことがなかなかできない」（中尉・分隊長。A-3：p 204）。「この世界にうまく戻ってこれない。生きることが…ただ生活が続けることが…ここでは息苦しい。アドレナリンで血がたぎっている。感覚が研ぎ澄まされ、命を惜しまないような瞬間が足りない。……アフガン病だ…。あのリズム、乱闘に飛び込んでいくようなリズムが必要なんだ」（少佐・大隊長。A-3：p 285）。「あの生活が続けていたくて……。ニカラグアに行かせてほしいとお願いしました…。戦争がおこなわれている地域ならどこでもいい。ここでは…私はここではもう、生きていけないんです…」（女性・細菌学医。A-3：p 189）。

④母親たちの苦しみ

母親たちの態度の中で多く見られるのは、国家への義務を果たすように、戦地に赴くように子どもを育てたことへの後悔である。「戦場を見たこともない少年たち。まだ子供も同然だったのに。いきなり戦火のなかに放り込まれて、でもあの子たちはそれを名誉なことだと思っていたのね。私たちがそんな子に育ててしまった」（A-3：p 199）。「あの子にだって、私自ら『義務は義務。果たさなければいけないものなのよ』と教えました。……『ごめんなさい。あんなことを教えてたお母さんを、許してちょうだい』（A-3：p 291）。

母親たちは、国家や党を恨めしく思ったりする。子どもの育て方を間違った自分を責める気持ちと並存する場合もある。「以前はあの子を殺した人を恨んでいました。でもいま

は、あの子を現地に送り込んだ国が憎い」(A-3：p 113)。「ときにはまた、この国の政府や、党や……権力を呪わしく思うこともあります。私は共産主義者ではあるけれど、でも知りたいんです——どうしてなのか。なぜあの子は亜鉛で包まれなければならなかったのか」(A-3：p 291)。ある母親は、地区内で住みたい場所があれば言うように、地区の執行委員会から促されたので、息子の墓に近い住所を要望したところ、『なにを言いだすんだ。中央委員会の建物じゃないか、党幹部専用の住宅だぞ』と言われた。『息子の命はそんなものなんですか?』と反論したのが効いたのか、一応中央委員会に頼んでくれた。が、その結果は『悲しみのあまり気が狂った母親の言葉を真に受けるなんて、なんだおまえはって、どやされてね。危うく党から除名されかけたよ』だった(A-3：p 221)。

幸い生きて帰還したとしても、子どもたちが多く PTSD に苦しんでいるとすれば、その程度に応じて母親たちも苦しんでいると考えるのが自然だろう。アレクシエーヴィチは、殺人事件を起こしたある帰還兵とその母親のことをとりわけ気にかけている。「私は自らあの子を戦地に送り込んだんです。先延ばしにすることもできたのに。遅くなってほしかった。軍隊に入ればもっと立派になる、強くなるんだって、自分にもあの子にも言い聞かせてた」(A-3：p 5)という自責の念がある母親は、面会に通い続けたが、息子の出所後も母子関係が修復することはなかった(B-1：p 123f.)。

⑤アレクシエーヴィチ裁判

アレクシエーヴィチは、1993年2次に渡り、それぞれ別のアフガン帰還兵と(帰還兵の母親とは別の)母親計4人の証言者から名誉毀損で提訴された。アレクシエーヴィチ自身は母親の方をより気にかけていたようで、第2次裁判の最終陳述において、「私は知っています——母親たちが私と法廷で争いにきたのではなく、旧体制が私と争いにきたのです」(A-3：p 394)、「亜鉛の棺を送りつけられた母親たちが、今度は作家を訴えろとけしかけられる」(A-3：p 395)あるいは、「母親たちの背後に、將軍たちの肩章が見え隠れしています」と述べている(A-3：p 398)。

本書で「ユーラチカ、現実はあるあなたに教えたのとはまったく違うの。……アフガニスタンへ行けばあなたは殺される。祖国のためなんかじゃない、なんのためかわからずに殺されるの…。理由もなく。たいした理念もないのに優秀な若者を死に行かせるなんて、そんなの国のすべきことじゃないでしょう」(A-3：p 58)と証言した母親インナ・ガロヴニョワは原告として、次のように陳述している。「息子は軍の演習場で育ち、父親の跡を継いだんです。うちは祖父の代も、あの子の父親の兄弟も、従兄弟たちもみんな軍に入っています。そういう家系なんです。アフガニスタンに行ったのも、息子が誠実だったからです。あの子は軍の宣誓をしたんです。必要と判断して行ったんです。私は素晴らしい息子たちを育てあげました。…アレクシエーヴィチは私は殺人犯の母だって証明したがってる。…私が現地に送り込んだっていうんですか。私があの子に武器を渡したとでもいうんですか。私たち母親が、現地で戦争がおこなわれていたことの罪を被らなくてはいけないんですか。現地で人が殺され、略奪があり、麻薬が乱用されていたことの罪を」(A-3：p 355)。本書での証言とは違って、インナは息子が国家への義務をきちんと果たしたこと、

そしてそんな息子に育てたことを誇っている。ただ、アフガン現地での実態が正義とはほど遠いことを認めながら自分には責任がないと言い張る後半部分は矛盾しており、読んでいて痛々しい。

アレクシエーヴィチは陳述において、インナの人間性に敬意を表しつつも、インナが（そして母親たちが、さらに直接の当事者ではない者たちも）「戦争の神話」＝「戦争文化」に捉われていることを指摘し、そこから脱却すべきと主張する。「私はインナ・セルゲーヴナ・ガロヴニョワさんがどんなかだったか、よく覚えています。お会いして好きになりました。そのつらさを、真実を、苦しみ抜いた心を抱えた彼女を。いまは——戦没者母の会会長という公の顔を持った、政治活動家です。もう以前とは別の人間であり、昔と同じなのはその名前と戦死した息子の名前だけ。その息子を再び犠牲にしました。まるで生贄の儀式のようです。私たちは奴隷であり、隷属に浪漫を抱いているのです」（A-3：p 400）。「少年たちは…祭壇に捧げられた犠牲者です。英雄ではなく受難者です。…私たちすべての人に罪があり、すべての人が同じ虚偽に加担していた——あの本はそう語っているのです。あらゆる全体主義の最も危険な点は…すべての人を自らの犯罪の共犯者にしてしまうところです。……私はお母さんがたに申し上げたいのです——いま、あなたが守っているのはお子さんたちではありません。あなたは恐ろしい理念を——殺人者の理念を守ろうとしているのです」（A-3：p 397f.）。「私たちは幼少のころから武器を持った人間を愛するよう教え込まれてきたし、祖先もまたそうでした。戦争が終わって数十年ものちに生まれた者でさえ、まるで戦時中のような育てかたをされてきたのです。だから私たちの視野は狭まったままです——革命期の非常事態の犯罪があり、スターリンの督戦隊や強制収容所があり、近年では〔リトアニアの〕ヴィリニウスや〔アゼルバイジャンの〕バクーや〔ジョージアの〕トビリシ、〔アフガニスタンの〕カブールやカンダハールでなにがあったのかを知っていながら、いまだに武器を持った人間というと1945年の戦争に勝った兵士を思い描くのです。……私たちは深く考えもせず、あるいは手っ取り早い政治思想で武装して、戦争を正当化しがちです」（A-3：p 395）。

4. 『完全版 チェルノブイリの祈り』（1997年。完全版2013年）

1986年4月26日に、ウクライナにあるチェルノブイリ原発で起こった事故の詳細を紹介する余裕はここではない。ただ「事故当時の風向きと雨の影響で、『死の灰』とも呼ばれる大量の放射性核種の70%がベラルーシの大地に降り注いだ…」（B-1：p 156）ことだけ指摘しておきたい。

アレクシエーヴィチの両親は高い汚染から逃れるべく離村を余儀なくされ、さらに「医者としてチェルノブイリから近い村で働いていた」妹は、「事故後、癌を発病して」亡くなった。妹の娘を引き取って育てたアレクシエーヴィチにとって、原発事故は他人事ではなかった。曰く、「私自身が事故の当事者であり、目撃者でした。私もあの出来事の一部だったのです」（B-1：p 158f.）。

当初彼女には、本を著すのに必要な視角、彼女の言葉を使えば「哲学」がなかった。し

かし、「爆発炎上した原発に緊急出動して消火活動に当たった消防士の妻」の証言を聞き、何を書くべきか教えられた気がした。すなわち、「私たちはいったい誰なのか。どのような人間なのか。なぜそのような人間になったのか。私たちはどこに行くのか」(B-1:p 160)。本書、(厳密に言えば、「完全版」ではなくその前の「最終版」)は、そんなアレクシエーヴィチが約10年かけて仕上げた作品である。

チェルノブイリ原発事故とそれへの対応は、一種の戦争として理解できる。しかし戦争といっても全く新しいタイプの戦争である。「音もなく、匂いもしない、姿も見えないものが人を殺してしまう。人々は木々が茂り小鳥のいる世界で恐れを知らず暮らしていた。魚を食べてきた。それなのに人が死んでいく」(B-1:p 249)。これは「テクノロジーと人間の『戦争』」(B-1:p 259)なのである。この新しいタイプの戦争に備えができていなかった当局の対応は、極めて不適切なものであった。

①当局の不適切な対応

i. イデオロギーに基づく事故解釈

「新聞に書かれていたのは、敵の陰謀と西側のヒステリーについて。反ソ的大騒ぎと、我が国の敵が外国からまきちらしている扇動的なうわさについて」(ベラルーシ最高会議議員。A-4:p 187)だった。アレクシエーヴィチによれば、「発電所そのものではKGBが活動し、スパイや破壊分子をさがしていた。この事故は、社会主義陣営を破壊するために西側の秘密諜報班が仕組んだといううわさが流れていた」(A-4:p 33)。ある良心的な科学者(後述)にベラルーシ中央委員会第一書記が放った言葉は、「あなたの研究所の放射線測定員はなんだね。町を走り回って、パニックの種をまき散らしておるじゃないか！わたしはモスクワに指示をあおいだんだ、…ここは万事順調だ……。決壊箇所には軍隊、軍用車、軍用機が投入されている。原発では政府委員会、検察庁が活動している。あそこで解明している……。冷戦中だということを忘れるな。われわれは敵にかこまれているんだ……」(ベラルーシ科学アカデミー核エネルギー研究所・元所長[以下、元所長と記す]。A-4:p 337)であった。

党幹部が冷戦の発想に捉われていたとしても、核物理学・核化学の専門家なら上記の「良心的な科学者」のように、今回の原発事故の危険性を認識し、警告できたであろう。が、残念ながら、科学者においてもイデオロギーが優位していた。「わたしたちは報告書をたえず書いていました。たえず…。しかし、結果について公然と発言することは……学位を失うことであり、ことによると党员証も……。…理由は恐怖心ではなく……。もちろん、それもあったけれど……国を信じていた、問題は完全に信念にあるのです。……わたしたちは……報告書を書いてた…。でも、沈黙していた、命令に絶対的に服従していた。なぜなら党規があり、わたしは共産党员なのですから。…信念があった…。第一に、わたしたちの生活はうつくしくて公平である、わが国において人間は最上のものである、あらゆるものの尺度であるという信念」(ベラルーシ科学アカデミー核エネルギー研究所・元主任技師。A-4:pp 262-4)。あるいは、「住民の被曝線量は、核爆弾実験地区、核実験場の警備兵の数百倍もありました。…線量計が音をたて、針はふりきれんばかり……。それな

のに、集団農場の事務所には掲示がさがっている。地区の放射線専門家の署名入りです。『タマネギ、サラダ菜、トマト、キュウリ、すべて食べられます』（ジャーナリスト。A-4：p 329）。

ii. エリートたちのエゴイズム

イデオロギー優位の態度を一面では示しながら、エリートたちは放射線の危険性を知り、わが身は守っていた。「わたしは、党幹部たちが自分たちだけヨウ素剤を服用していたとの情報をつかんでいます。うちの所員たちが彼らの検査をください、全員の甲状腺がきれいだったのです。ヨウ素剤なしでこんなことはありえない。自分たちの子どももこっそりつれだしていた、難を避けるために。自分たちは、出張にでかけるとき、防毒マスク、特殊作業着を持っていた。ほかの人たちにはどれもなかったものです。さらに、ミンスク郊外に特別な家畜の群れが飼われていたことは、ずいぶんまえから公然たる秘密だ。一頭一頭の牛に番号札がつけられ、1人ひとりに割りあてられていた」（元所長。A-4：p 339）。「食堂には集団農場から肉、牛乳、サワークリームが運ばれてきて、ぼくらは食っていた。医者はいっさい手をつけようとしなかった。食事の用意ができると彼は日誌に記入する、すべて基準値以下と。しかし、自分じゃ試食していなかった」（A-4：p 110）。「ヘリコプターで科学者グループのおでまし。ゴム製の作業着、ロングブーツ、ゴーグル…。ひとりの男に老婆が近よる。…『ほう、科学者さんですか。みなの人、この人をみなされ。がっちり着飾って、仮装しとりなさる。あたしらはどう？』」（事故処理作業員。A-4：p 130）。「中央委員会から指導監察官たちがやってきた。彼らのコース——ホテルから共産党の州委員会へ車で、帰りもこれまた車で。状況調査は、地元新聞の綴じこみで。ミンスクのサンドイッチが満杯の旅行かばん。お茶を入れるのはミネラルウォーターで。これもお持参だ」（A-4：p 178）。「ぼくらは汚染された土地の表面をけずりとり、車につんで、汚染廃棄物捨て場に運んでいた。……将校たちはテントにこもりっきり。室内履きでぐうたらしていた」（化学技師。A-4：p 256, p 258）。

iii. 官僚主義の弊害

ソ連共産党は、書記長を頂点とする巨大なヒエラルキー組織である。共産党が国家を指導していることを考えると、ソ連国家全体が巨大なヒエラルキー組織であるとも言えよう。党员たちは、自分で判断することを避け、組織の中で上からの指示を待ち、それに従おうとした。「情報がまったくない。政府は黙して語らず、医者は何にもおしえない。何にも答えない。地区では州からの、州ではミンスクからの、ミンスクではモスクワからの指示を待っていた。長い長い鎖…」（女性・農村の教師。A-4：p 290）。党地区委員会元第一書記によれば、「党の中央委員会、州委員会からの電報、電報……。われわれは任務を課せられた、パニックを許すなど。……あのとき、もしわたしが住民を通りにつれだしてはならんと、表明したなら、『なにをおっしゃる、メーデーをぶちこわす気ですか』。政治事件ですよ。党员証返却……。……われわれはセシウム入りの牛乳を牛乳工場に運んでいた。肉を供出していた。40キュリーの牧草を刈り取っていた。供出割当を達成しようとしていた…。…上ではわれわれの供出割当を撤回してくれませんでしたからね……」（党スラヴ

ゴロド地区委員会・元第一書記。A-4：pp 319-22)。「彼らの生活方針，機関で身につけたことは——でしゃばらないこと，ご機嫌とりをすること。…[ベラルーシ中央委員会第一書記のスリュニコフに]電話があったのでしょう，クレムリンの…ゴルバチョフから…。きみたちベラルーシ人は，そっちでパニックを起こさないでくれたまえ，ただでさえ西側が騒いでいるのだからと。…上にいるおえらがたの気に染まぬことをすれば，昇進はストップし，割りあてられるのはべつの旅行クーポン，べつのダーチャ…」(元所長。A-4：p 338)。

iv. 国民の命の軽視

エリートたちの冷戦思考(＝イデオロギー優位)とエゴイズム，そして党员たちの保身志向(＝官僚主義)から結果するのは，国民の命の軽視である。

a. 住民の命を救うことより，上からの指示に従い「パニック防止」を優先

先に挙げた「良心的な科学者」とは，ベラルーシ科学アカデミー核エネルギー研究所長(当時)のネステレンコである。彼の証言から引いておこう。『放射能の雲はわれわれにむかって動いています。ベラルーシに。ただちに住民へのヨウ素剤予防投与を実施し，原発周辺に住むすべての住民を移動させる必要があります。100キロ圏内の住民と家畜をたちのかせなくてはなりません』。…スリュニコフがいう。『あそこで火事があったが，鎮火したということだ』……。わたしたちの大地にはすでに，数千トンのセシウム，ヨウ素，鉛，ジルコニウム，カドミウム，ベリリウム，ホウ素，量不明のプルトニウム(チェルノブイリ原発のようなウラン・黒鉛原子炉 RBMK 型では，原子爆弾の原料となる兵器用プルトニウムが作られていた)が積もっていた——ぜんぶで450種類の放射性核種が。これはヒロシマに投下された原子爆弾350個に相当する量です。……方法はあったのですよ！わたしたちは提案していた……公表なしで，パニックなしで…。飲料水がとられている貯水池にヨウ素剤をいれるだけ，牛乳に添加するだけ。……ミンスクには700キログラムのヨウ素剤が準備されていた。倉庫に眠ったままだ…。上からの怒りのほうが原子よりも恐怖なのです。一人ひとりが電話や命令を待っていたが，自分からはなにもやらなかった。個人責任という恐怖です。……執務室はいつも自分で閉めていた。ある出張からもどてみると，ファイルが消えていた……研究所の放射線モニタリング機器がすべて取りあげられた。没収されたのです。いかなる説明もなく。自宅には脅迫電話がかかってきた。……精神病院にぶちこむこともできるんだぞ…脅迫されていた。交通事故にあうかもしれないぞ…警告されていた。刑事告訴されるかもしれないなかった。反ソ的な言動を理由に。あるいは，研究所の経理部長が帳簿につけていない一箱のくぎを理由に…。刑事告訴をおこされた…。彼らの思い通りになった。わたしは心筋梗塞で倒れたのです…。…1年目…。100万トンの『汚染』穀物が配合飼料に加工され，家畜のエサになり，その肉はあとでわたしたちの食卓にのぼった。ニワトリや豚はストロンチウム入りの骨粉をエサに与えられていた…。……わたしたちは村々で，無作為に子どもたちの検査をした…。数千人の少年少女たち。この子たちは——1500，2000，3000マイクロレントゲン。3000マイクロレントゲン以上。この少女たち…はもう子どもは生めないだろう。遺伝子にキズがついている…。

…5年後…。子どもの甲状腺がんの発病率が30倍にはねあがった。先天性異常、腎臓や心臓の病気、小児糖尿病の増加が認められた…。10年後…ベラルーシ人の寿命が60歳に縮んだ…」(元所長。A-4：pp 335-44)。

b. 不十分な装備で作業

深夜に爆発事故が起こって、消防士が出動した。ある消防士の妻によれば、「夫たちは防水服を着ずにでたのです。シャツのままいっちゃいました。警告はありませんでした。ふつうの火事だと呼びだされたんです…」(消防士の妻。A-4：p 2)。消防士たちや当時発電所にいた人たちは数時間後には病院にいた。「10時、運転員のシシェノークが死亡。1人目の死者でした」。この消防士も、壮絶な闘病生活の末、2週間後に亡くなった。「時がたちやがて、この病院の多くのお医者さん、看護師さん、とくに看護助手さんたちは病気になって亡くなります」(同上。A-4：p 3)。

その後事故処理に当たった人たちも無防備で作業をした、より正確にはさせられた。作業員の人命軽視がよくわかる小話がある。「アメリカ製のロボットが屋上に送りこまれました、5分間仕事をして——ストップ。日本製のロボットは9分間仕事をして——ストップ。ロシア製のロボットは2時間仕事をしています。無線で指令が飛びます。『兵士イワノフ、したにおいて一服してよろしい』。はっはっは！」(事故処理作業員。A-4：p 299)。命の危険を感じても断れなかった。なぜなら、「隊長がいう。『屋上に行くのは志願者だ。それ以外の者は一步外へ。きみたちとは検事が面談する』」(同上。A-4：p 300)からだ。「原子炉の屋上自体で作業した兵士たち…事故処理作業に投入されたのは…およそ34万人の現役軍人です。…彼らには鉛の前掛けが支給されましたが、放射線はしたからきたのです。…彼らがはいていたのは、いつもの防水厚布の長靴…。一日に1分半ないし2分ずつ屋根のうえ…。彼らが屋上でかき集めていたのは、燃料、原子炉の黒鉛、コンクリートや鉄筋の破片…。……遠隔操作のマニピュレーターはしょっちゅう…故障していたので…もっとも信頼できる『ロボット』は兵士でした。…崩壊した原子炉の屋根を通過した兵士は3600人。彼らは…はじめのうち、テント内で地面にわらを投げしいて「寝て」いた…。わらは現地調達したものです、原子炉のすぐそばの干し草の山から」(共和国連盟「チェルノブイリの盾」副理事長。A-4：p 224f.)。「ヘリコプター操縦士…ヴォドラシュスキイ大佐…彼自身は120回の出動をこなし、200トンから300トンの積荷を投下しました。1昼夜に4、5回の出動、原子炉上空300メートルの高度、操縦室の気温は60度にも。砂袋が投下されたとき、したではなにが起こっていたか？……放射線量は1800レントゲン毎時にも達していました。操縦士たちは空中で気分が悪くなっていた。ねらいを定めて落とし、目標の炎の孔に命中させるために、彼らは操縦室から頭をつきだして…下方を見ていた…。ほかに方法がなかった……。原子炉のしたで日夜トンネルの穴を掘っていた、400人の炭鉱夫たちのことは？…地盤凍結のために、液体窒素を流し込むトンネルを掘る必要があったのです。……彼らははだかで、気温が50度を超えるなか、しゃがんでトロッコを押した。そこもまた…数百レントゲンです……」(同上。A-4：p 228f.)。

他の作業も無防備でなされた。「ぼくが受けとったのは、肌着、足布、ブーツ、肩章、

軍帽、ズボン、軍服、ベルト、背負い袋。…ダンプカーがあたえられ、ぼくはコンクリートを運んでいた。……交通警官はマスクなしで立っていた。…放射能のほこりのなかに8時間ずつ立ちっぱなし」(A-4: p 107)。「洗濯をしてくれた女性たち…。…手洗いですよ。全員が年配の女性だった。手は水ぶくれだらけ、かさぶただらけ。洗濯物は汚れているだけじゃない、何十レントゲンもあったんです…」(A-4: p 109)。「2日目、すでに原発のまわりでゴミをかたづけていた…バケツでひきずって運んだ…ふつうのシャベルでかきあつめ、ほうきできれいに掃いた。……ほこりを吸いながら」(A-4: p 116)。「立入禁止区域の動物を射殺するよう指示を受けた猟師たちは、防毒マスクを「もらえなかった。…おれたちときたらシャツを着て、鼻に布きれた。そのシャツと長靴のままで家へ帰ったよ」(A-4: p 136)。「高所作業機械組立工たち…。夫たちは、移住させられた村の電気を切ってまわった、電柱にのぼった。ひとけのない家や通りをまわった」,「夫の班は7人、7人全員が亡くなりました」(事故処理作業員の妻。A-4: p 373)。「夫たちには、班全体に1台の線量計も与えられなかったんです」(同上。A-4: p 374)。

②国民の意識

国民の命を軽視する指示・命令に対し、国民の側はどのように反応したのだろうか? 下記の証言にあるように、命の危険を感じて指示・命令を拒否した人たちは当然ながらいた。それを除くと、2つのタイプに分けられそうである。

i. ソヴィエト的自由・ソヴィエト的ヒロイズム

第1のタイプは、命を危険にさらす行為の遂行に高揚感を覚える、あるいは自由だと感じるタイプである。「わが国のシステムは軍事的で、そもそも非常時において見事に作動するんです。そこではついに自由で必要な人間になれる。…そんなときのロシア人は、自分がいかに偉大で、唯一無二の人間であることを示すことができる」(A-4: p 109)。「若い連中……。いま彼らもまた死んでいますが、彼らは理解している、もし自分たちがいなかったらどうなっていたか……。…これは特殊な文化の人間だ…。功績の文化、自己犠牲の文化の」(共和国連盟「チェルノブイリの盾」副理事長。A-4: p 225)。「校舎のまわりの汚染された表土を取り除かなくてはならない、…『どんな防護用具が支給されますか。特殊な服や防毒マスクは届くんですか』。届かない、という返事。『シャベルを持参して、掘って下さい』。拒否したのはふたりの若い教師だけ…。…気持ちが落ちこむ、と同時に、義務をはたしているという思い。わたしたちの心にはそれがあるのです。困難な場所、危険な場所にいる、祖国を守るという思いが」(A-4: p 236)。「最初の数日、住民が感じていたのは恐怖だけではなかった、高揚感もあったのです。……わたしの机の上には数十通の請願書が置かれていた。『チェルノブイリへの派遣をお願いします』。…人びとは自分を犠牲にする覚悟ができていた。…ソヴィエト人気質というものがあったのです」(党スラヴゴロド地区委員会・元第一書記。A-4: p 322f.)。

こういう態度は、その「システム」が「軍事的」なソ連において、当局の教育宣伝活動の結果生じたと見るべきかもしれない。例えば、ある兵士の証言。「毎日、新しい『壁新聞』が張りだされていた。『勇敢かつ献身的に作業している』『耐えぬき、勝利しよう』。

うつくしい名前ではばれていた——『炎の兵士たち』（A-4：p 108）。

ちなみに、こういう態度は、ソ連における「われわれ」意識の常態化＝「わたし」意識の欠如と関連している。例えば、「わたしたちはいつも『われわれ』といい、『わたし』とはいわない。『われわれはソ連人のヒロイズムを誇示しよう』『われわれはソ連人の気質を見せよう』（モギリョフ女性委員会「チェルノブイリの子どもたち」代表。A-4：p 350）。「わたしたちがなじんでいたのはどんな生活ですか。村単位，共同体単位，工場単位，集団農場単位。わたしたちはソ連人だったのです」（女性・自然保護監督官。A-4：p 267）。ソ連人は、命も含めて自分の事にこだわらなかったのである。

ii. スラブ的/ロシア的メンタリティー

第2のタイプは、支配者に従属することに慣れている、非科学的な運命論者で、一面では苦しみを淡々と受け入れるが、他面では「なんとかなる」と楽観視したり、あるいは奇跡が起こり救われることを願うタイプである。「グチグチいうやつはいなかった。必要とあらばしかたない。祖国が召集した，祖国が命じた。こんな国民なんですよ，ぼくらは……」（化学技師。A-4：p 255）。「わが国の国民は，…一方ではニヒリズム，否定，他方では宿命論。権力を信じない，科学者も医者も信じない，そのくせ自分ではなにもやろうとしない。無邪気で周囲に無関心な人びと。苦悩そのもののなかに意味といいわけがみつかる，それ以外のすべてはたいして重要じゃないみたいです。……30キュリー…50キュリー…。トラクターの運転手たちは吹きさらしの運転席にすわり，放射能のほこりをすすっている……。……彼らが待っているのは奇跡…。教会に通っている。…神さま，どうか健康を…。…そこでくらししているのは自主性をもたない人間。…共産主義を望んでいる。待っている。汚染地に必要なのは共産主義…。そこではすべての選挙で『強硬な腕』に投票し，スターリン体制をなつかしんでいる，軍事体制を」（モギリョフ女性委員会「チェルノブイリの子どもたち」代表。A-4：pp 352-4）。「わが国の運命論，あのように能天気な運命論…。たとえば1年目，畑の野菜はなにも食べるなといわれましたが，それでも食べたり，貯蔵用にまわしたりしていた。見事なデキだったんです。……あの年，近所の人たちが地元の木材で床をあたらしくし，測ってみると許容値の100倍もの放射線量でした。だれもその床板をはがさず，そのまま住みつづけていた」（女性・教師。A-4：p 168）。「心の奥じゃぼくたちはみんな運命論者なんです，薬剤師じゃない。合理主義者じゃない。スラブ的メンタリティー…。自分の星を信じていたんですよ」（事故処理作業員。A-4：p 296）。「国民は，皇帝の支配下で生きることに慣れているのです。父なる皇帝の支配下で。皇帝は，書記長とか大統領とか呼ばれたりしますが，結局はおなじこと。……わたしたちは……ひどいスラブ的なまけ癖のせいで，自分の手でなにかを創りだす可能性よりも，どちらかというと，奇跡がおきるのを信じている」（女性・農業学博士。A-4：p 205f.）。

5. 『セカンドハンドの時代』（2013年）

アフガン戦争とチェルノブイリ原発事故で，ソ連は国力が疲弊し，また共産党指導部の

無能さ・無力さが露呈した。1985年、ゴルバチョフが書記長として改革運動（ペレストロイカ）と情報公開（グラスノスチ）を始めたが、にもかかわらず（あるいは、だからこそというべきか）体制維持はできなかった。1991年、ソ連は消滅し、その一構成国であったロシア共和国はロシア連邦となった。ロシア連邦は経済的には市場経済＝資本主義への移行を急ぎ、政治的には1993年憲法に見られるように自由民主主義を導入した。本書は、この体制転換という激動期を生きた/生きている人々の証言から成る作品である。

体制転換の過程で、人々の生活は激変せざるをえなかった。一方で、ソ連時代のイデオロギーが染みついた人たちは、いわば人生の基盤が崩れてしまった。その内の多くは現状に不満をもらし、旧体制を懐かしんだであろうが、耐え難い苦痛を覚えた人たちは自殺を図った。他方で、多くの民衆は生活が豊かになるだろうと期待していた。しかし現実とはほど遠かった。本書の邦訳者によれば、「ガイダール経済担当副首相（92年1月当時）の主導による『ショック療法』と呼ばれる市場価格の自由化は、国を大混乱におとし入れた。ロシア国民は90年代に、モノ不足、ハイパーインフレ、デノミという3大試練を経験、さらに預金封鎖により…預金が紙くずになるという経験もすることになった」（訳者あとがき。A-5：p 603）。うまく立ち回った一部の者だけが裕福になり、貧富の格差が拡大した。治安が悪化し、強盗や殺人が増えた。

つまるところ、ソ連時代を善しとする人たちも、市場経済に期待した人たちも、現実に幻滅したわけで、彼らは強力な指導者による事態の打開を望むようになった。アレクシエーヴィチによれば、「古くさい思想が復活している。偉大な帝国について、『鉄の腕』について、『ロシア独自の道』について……。ソ連国歌がもどってきた…。名前こそ『仲間』[ナージ]だが、共産青年同盟があり、共産党をコピーした権力の政党がある。大統領の権力は、書記長なみ。絶対的な権力だ。マルクス＝レーニン主義のかわりは正教……。…セカンドハンドの時代がやってきたのだ」（A-5：p 11f.）。自由民主主義の考え方を身につけ生きていくべきなのに、またそれができるチャンスがあったのに、人々は使い古しの＝セカンドハンドの思想に頼って生きている、それを残念に思うアレクシエーヴィチの気持ち、書名『セカンドハンドの時代』に反映されている。

①「ホモ・ソヴィエチクス」あるいは「赤い」人間

アレクシエーヴィチによれば、「共産主義は、『古き』人間、古くさいアダムを作りかえようという、無謀な計画をもっていた。…七十数年のあいだにマルクス＝レーニン主義実験室において一種独特の人間のタイプ、『ホモ・ソヴィエチクス』が作りだされた」（A-5：p 1）。「ホモ・ソヴィエチクス」は、「思想と強く一体化し、はぎとれないほどに自分のなかに思想を入らせてしまった人で、国家が彼らの宇宙になり、彼らのあらゆるものの代わりになり、彼ら自身の人生の代わりにさえた、そういう人びと」（A-5：p 2）である。「ホモ・ソヴィエチクス」は『「赤い」人間』と呼ばれることもある。「私のいう『赤い』人間とは、ソヴィエト的な思考を持つ人間、みずから『共産主義の建築家』と自負した人のことです」（B-1：p 309）。

帝政時代の貧困を背景に支持を広げた共産主義は、公平でみんなが幸せになれる社会を

理想とした。「われわれの世代は…われわれには偉大な計画があった。…新しい世界を建設しよう、みんなを幸福にしよう。……われわれが思い描いていたのは、貧乏人も金持ちもいない、公平な世の中なのです」（1922年からの共産黨員。A-5：p 204f.）。そこでは、人はエゴイストではなかった。「いまのように、自分が第一という者はいなかった。…いたのは、われわれ。われわれ！われわれなんですよ！」（同上。A-5：p 209）。

しかしながら、理想社会を実現するための手段は強引で、極めて暴力的なものであった。「白軍の虫けらどもを殺せ！革命体制をつくろう！革命の最初の数年のスローガンは『鉄の腕で人類を幸福へ追いこもう！』」（同上。A-5：p 215）であった。このスローガンは、スターリンの収容所の門の一つに掲げられていた（B-1：p 270f.）。収容所があり、密告があり、「戦争文化」があった。しかしながら、「社会主義というのは、収容所や密告、鉄のカーテンだけじゃなくて、平等で明白な世界でもあるのです。全員でわけあう、弱い人をいたわって思いやる、なにもかもかき集めてひとり占めしない」（女性・党地区委員会第3書記。A-5：p 57）。「ホモ・ソヴィエチクス」は、こうした手段が目的に適合的かどうか疑うことなく、理想を信じた人である。

十月革命で帝政が倒れた後、内戦を経て、ソ連が成立した。内戦が終結したとは言えソ連は内外の敵の脅威に直面しており、権力を掌握したボルシェヴィキの意識においては常時戦争状態にあった。従って、命をかけて祖国を守るべきことが国民に対して徹底された。「父は人間ではなく、思想の一部だった。祖国はひたむきに愛すべきもの。無条件に。子ども時代、ずっとそう聞かされていたんです。命は祖国を守るためにだけ与えられていると…」（兵士・企業家・移民。A-5：p 468）。「わたしたちは、ママにこれまでなにをおしえてもらった？他人のために生きよ…高い目的のために。戦車のしたに倒れよ。飛行機にのって祖国のために燃えよ。とどろく革命、英雄的な死。死はいつだって生よりもうつくしかった。わたしたちはクズで、できそこないに育った。わたしはイーゴリもおなじように育てた」（14歳で自殺した息子の母親。A-5：p 177）。「[幼稚園の] 先生がいう。『これは若き英雄です。この人は手榴弾で自爆して、ファシストをいっぱいやっつけたんですよ。みんなも大きくなったら、彼のような人になるんですよ』（A-5：p 197）。「わたしが共産少年団に入団することが認められた日のつぎの朝、国歌の放送がはじまると、ぱっととびおきて、終わるまでベッドのうえに立っていた…。共産少年団の誓いのことばは『わたしは…入団にあたり…わが同志たちの前で…厳粛に約束いたします。わが祖国を熱烈に愛することを』。……共産青年同盟の宣誓のことばは『もし、わたしの命がわが国民のために必要とあらば、それをささげる覚悟です』。…共産党に入るとき、わたしは入党申請書に書きました『綱領と規約を理解し認めます。全力をささげる覚悟があり、必要とあらば、この命をわが祖国にささげる覚悟です』（女性・医師。A-5：p 113f.）。「ホモ・ソヴィエチクス」は、祖国を第一に考え、それを守るために命を捧げる覚悟ができて人である。

このような「ホモ・ソヴィエチクス」の中には、体制転換期の状況すなわち価値転換、経済的混乱、治安の悪化等を文字通り耐え難く感じた人もいた。1941年6月、ベラルーシ最西端にあるブレスト要塞でドイツ軍の攻撃を最初に受けた時、陥落するまで抵抗し捕虜

となった（後に脱走に成功した）チメリャン・ジナトフもその1人である。捕虜になったため「裏切り者」とされていたジナトフは後に名誉回復し、「国家英雄」とされたが、その特権を活かして物資を購入したりすることを嫌がった。妻によれば、「皆と同じように平等に生活したがついていました。特権をひけらかしてはいけないといつも私たちに言っていました。心の中の誇りで十分なのだ」と（B-1：p 99）。共産主義の理想を純粹に信じた人だったのである。そのジナトフが、線路に身を横たえ轢死した。遺書には「…私がこのようなかたちで現エリツィン、ガイダール政権に抗議することをお許しください。我々のような古参兵が現政権と戦うためには、これ以外の方法はなかったのです。老いて生き長らえるために彼らの前にひざまずき、わずかな補助金を物乞いしながら棺に入るよりは、私はむしろ、立ったまま死にたい。……我々は英雄だった。そして極貧の中に死んでゆく…」（B-1：p 91）とあった。共産主義の理想を信じ、命をかけて祖国を守った老兵の矜持と現状への絶望が感じられる。ただ、妻によれば、ジナトフは自殺に際して「国家と、よその人びとに遺書を書きのこしていた。あたしたちにはなんにも…ひとと言もなかった」（A-5：p 262）。このジナトフの行動に「ホモ・ソヴィエチクス」の心性の一面がよく現れている。

②物質的豊かさを願う人々——裏切られた期待

他方で、多くの民衆は西側の人々のように物が豊かな生活を送りたいと願っていた。それはソ連では期待できなかった。ゴルバチョフの時代でも、「自由と配給券。引換券…配給券…。パンから穀物、ソックスにいたるまですべてのものが。行列に5時間も6時間もならんでいました」（A-5：p 193）、「配給券でひとりが月にもらえるのは、穀類が2キロ、肉1キロ、バター200グラム。どこへ行っても行列、行列、行列、手のひらに番号」（女性・広告マネージャー。A-5：p 432）という状態であった。だからこそ民衆は市場経済化を喜んだ。「ソ連がなくなったのは、女性用ブーツが不足し、トイレットペーパーが不足し、オレンジがなかったから。いまいまいしいこのジーンズがなかったからなんです」（女性・党地区委員会第3書記。A-5：p 58f.）。「アツアツのハンバーガーを売るマクドナルドが開店するのを夢みていたし、ひとりひとりがメルセデスやビデオデッキを買うのを夢みていた。キオスクでポルノ映画が売られるのを夢みていたんだ」（A-5：p 132）。「マクドナルド1号店には1キロもの行列…。…インテリの大人たちが、その箱や紙ナプキンを大事そうにしまっていた。お客がくると得意げに見せていたんですよ」（A-5：p 202）。

ところが現実とは全く違っていた。インフレやデノミで手持ちの金の価値が急落した。給料は安く、現物支給の場合もあった。物乞いをする人も増えた。いくつか証言を紹介しよう。「あたしらは20年も30年もアパートの部屋がもらえる順番を待ってた…。こんどはガイダールがでてきてわらってる。『買いたい人は、どうぞ』だってさ。どこにそんなお金があるんだい。あたしらのお金はパーになっちゃった…」（女性・自殺した年金生活者の隣人。A-5：p 94）。チュバイスは「バウチャー1枚は高級国産車『ヴォルガ』2台分の価値があると約束していたが、それがいまでは2コペイカの価値でしかない」（A-5：p 199）。「祖母が一生かけて蓄えた5000ルーブルは預金通帳に入っていて、祖母がいうには、これ

だけあれば死ぬまで大丈夫、困ったときにも葬式代にも足りるはず、でした。でも、そのお金で買えるのは路面電車の切符1枚になってしまった…マッチ1箱に」（自殺した女性技術専門家の娘。A-5：p 409）。「肉1キロの値段が320ルーブル、オーリャお婆さんは小学校の先生で、お給料が100ルーブルでした」（同上。A-5：p 417）。「お年寄りの姿がとてもわすれられない。道路沿いにずらっと並んで立ち、物乞いをしていた。…わたしは…化粧品工場で働いていました。お給料のかわりに、香水や…化粧品が支給されてたんです」（A-5：p 41）。「大学の図書館や学部長室には、塩漬けのキュウリやトマトの樽がおかれていた。キノコの樽、キャベツの樽。漬けものを売って、そのお金で先生たちのお給料が払われていたんです」（A-5：p 195）。

他方で、エリートたちがその地位を活かしていい思いをしているのを知り、民衆は憤慨した。「いま会社を持っているのはどんな人たちですか。キプロス島やマイアミに別荘を持ってるのは？共産党のお偉方だった人たちです。…最後までやりとげるべきだった、ソ連共産党のためのニュルンベルク裁判を起こすべきだった」（A-5：p 23）。「わたしたちの目の前で集団農場や工場がごっそり盗まれはじめた…。そのあと、それらはただ同然で買い占められてしまった。わたしたちが一生かけて建設したのに、すべてが二束三文で売られた」（警察伍長だった娘がチェチェンで怪死した母親。A-5：p 535）。「下院の一階に立って…。目を見張りました。なんと、宝石の売店があるのです。…わたしが一生かけて稼いだお金は、そこのいちばんちっぽけなダイヤの指輪代にもなりません。ひとつの指輪代にも…。わたしたちの代議員たち、人民代議員たちは…どこからそんなお金を？」（同上。A-5：p 549）。

③内戦とテロ

ソ連の崩壊は、各構成共和国において、民族意識の高揚とその独立を引き起こした。その過程で、「支配者」であったロシア人に対する憎悪が表面化した。例えば、タジキスタンの場合。「アパートの壁にはプラカードがぶらさげられた。『ロシア人ども、タジキスタンから手をひけ！』『共産主義者ども、てめえのモスクワにとっとと失せやがれ！』……ほんとうに平和的で静かな人びとが、人殺しに変わってしまった…。…鉄の棒を持って歩き、女性のおなかを切りさいている。店やキオスクを襲っている」（「タジキスタン」基金付属「移民と法律」モスクワ・センター所長。A-5：p 504）。逆に、「わたしたちの若者、タジク人…。…彼は…つきたおされる。野球のバットでなぐられ、最初は地面をころがりまわる、やがて動かなくなる」（同上。A-5：p 507）。

共産主義の理想によって抑えられていた民族対立が重しがとれた結果勃発することもある。例えば、アゼルバイジャンにおけるアルメニア人の虐殺。『母は中庭に引きずりだされ全裸にされて、たき火のなかへ！身重の姉はたき火のまわりでむりやり踊らされた…殺されたあと、鉄の棒であかちゃんがおなかからかきだされた』『父はめった切りにされた…オノで』（女性・アルメニア難民。A-5：p 392f.）。逆に「町にはすでに難民があふれていた、アルメニアから逃れてきたアゼルバイジャン人の家族です。彼らは手ぶらで逃げてきた、なにも持たずに。アルメニア人がバクーから逃げ出したのとまったくおなじよ

うにして。そして彼らが話すこともなにからなにもでななじ。……女たちを窓から投げずて…頭を切り落とす…死体におしっこをかける…」(同上。A-5：p 399)。かつてのソ連の首都モスクワに逃げても心は休まらない。「『かぎ十字をつけたスキンヘッドがいる…。連中のロシアはロシア人のため、わたしたちはジャマ者』」(同上。A-5：p 403) 扱いだからである。あるいは、ジョージアとジョージア北部のアブハジアの対立でも残虐な行為がなされた。「少年の両耳がそぎ落とされた、アブハジアの歌を聞かないように。若い男性は、…あれを…切りとられた、おくさんが彼の子どもを生まないように…」(女性・測量技師。A-5：p 312)。戦闘を止めようという勇気ある行動は功を奏しなかった。「べつのグルジア人 [=ジョージア人] はすくくとたちあがり、自分を撃っている男たちに向かって歩きだした『アブハジア人の兄弟たちよ！おれはきみたちを殺したくない、きみたちもおれを撃たないでくれ』。この人は背後から味方に射殺された」(同上。A-5：p 310f.)。

独立を望みながら、ロシア連邦の軍事介入により独立を達成できなかったケースがある。ソ連時代の末期にチェチェン(当時はチェチェン・イングーシ共和国)は独立を宣言したが、ソ連政府は認めなかった。後継のロシア連邦も認めず、エリツィン大統領は軍事介入を行った(=第1次チェチェン戦争)。なぜそんなにも強硬にチェチェンの独立を拒否したのか？考えられる理由の一つは、豊富な石油資源の確保である。警察官としてチェチェンに派遣された娘が怪死した母親の証言によれば、「『ママ、チェチェンって土地ぜんたいに石油がしみこんでるの。どこの畑を掘っても石油がでてくるのよ』。…あの子たちは祖国を守るためではなく、石油やぐらを守るためにあそこで戦っていたんです」(A-5：p 528)。ロシア人のプライドも理由であったかもしれない。「超大国」であったはずのソ連の崩壊によって、ロシア人のプライドは大きく傷ついた。アレクシエーヴィチによれば、「ロシアがバルト三国やウクライナ、タジキスタンを失ったときも、やっとの思いで耐えてきました。しかし、今度はチェチェンという小国がロシアから抜きたいなどと言い出し、自分を侮辱しようとしている。許せない、という感情です」(B-1：p 148)。アンナ・ポリトコフスカヤによれば、ドミノ効果を恐れて、エリツィンはチェチェンの独立を認めなかった(C-1)。あるいは、鎌倉の言うように、「イスラム圏のイランやトルコに近い国境防衛拠点」(B-1：p 139)だからという、地政学的な理由もあったのかもしれない。

④「鉄の腕」願望

エリツィンはチェチェンの独立を阻止する力を持つ「強い指導者」であることを立証しようとしたのであろうか、チェチェンに軍事介入を行った(1994.12)。強烈な愛国心に鼓舞されたチェチェン戦士たちは果敢に戦った。戦争は決着がつかず、1996年8月、「5年間の非戦について」合意が達成されたが、問題が解決したわけではなかった。1999年9月、「ダゲスタンやモスクワ、その他のロシアの街で一連のアパート爆破事件が起きる」と、この8月に首相に任命されていたプーチンは、「爆破事件の犯人と目されているチェチェンのテロリストたち…に対する情け容赦のない戦争を始め、ロシアを常態に戻すことを誓った」(C-1：p 393)。1999年12月に大統領代行となったプーチンは、「2000年3月26日、…ロシア大統領選に勝利し、ロシアが敵との戦いにおいては『強いロシア』であり、『鉄

の手』を持つ、というイメージづくりに戦争を最大限利用した」(C-1：p 40)。

その後、「エネルギー価格が高騰し、ロシア経済は急成長を遂げて経済危機を脱した。……プーチンは国を順調に建てなおし社会の混乱を收拾して、新興財閥を政界から追放、政治上層部を治安・国防関係省庁出身者で固めて強いロシアをめざして国民の高い支持と評価をえた」(訳者あとがき。A-5：p 604)。それぞれの理由から多くの民衆が体制転換期の混乱を收拾してくれる「強い指導者」を待望していたが、その「鉄の腕」願望が満たされたのである。「国の半分が新しいスターリンを待っている。いまにそういう人物があらわれて、秩序を整えてくれると」(女性・党地区委員会第3書記。A-5：p 63)。「スターリンの映画や本が何十も世にでた。…国の半分がスターリンを待ち望んでいる…。国の半分がスターリンを待ち望んでいるのなら、彼のような人間は必ずあらわれるんです」(A-5：p 371f.)。そして、「神さまがわたしたちのもとにプーチンをつかわした…」(A-5：p 384)。

<参考文献>

A. 「ユートピアの声」シリーズ

[原書の発行年については、訳者あとがき等に依拠した。訳者あとがきに不統一が見られる場合、筆者の責任で決定した。]

1. 三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』(岩波現代文庫 2016) orig. 1984
(三浦みどりは、原書1984年版の邦訳を「次々に著者から送られてくる追加や書き換え」(訳者あとがき。A-1：p 488)に応じつつ完成させた。邦訳は2008年7月に群像社より刊行された。岩波現代文庫版は、この群像社版を底本としている。)
2. 三浦みどり訳『ボタン穴から見た戦争』(岩波現代文庫 2016) orig. 1985
(もともと、三浦みどりによる邦訳は群像社より2000年11月に刊行された。岩波現代文庫版は、この群像社版を底本としている。)
3. 奈倉有里訳『亜鉛の少年たち』(岩波書店 2022) orig. 1991⇒増補・改訂版2013
(三浦みどり訳の『アフガン帰還兵の証言』は1991年版の『亜鉛の少年たち』を底本として、日本経済新聞社より1995年に出版された。原書が出版された後、アレクシエーヴィチは名誉棄損で提訴されたのだが、アレクシエーヴィチは、裁判の過程や関連する記事を含む増補・改訂版を出した。翻訳書は、その2016年版を底本としている。訳者が代わったのは、三浦みどりが2012年12月にガンで亡くなっていたからである。)
4. 松本妙子訳『完全版 チェルノブイリの祈り』(岩波書店 2021) orig. 1997⇒完全版2013
(アレクシエーヴィチから送られてきた「最終版」の原稿を基にした、1997年版の松本妙子による邦訳が、1998年、岩波書店から出版された。ところが「最終版」の後「10年近く、アレクシエーヴィチは書き続けていた」(訳者あとがき。A-4：400)。本訳書は、その成果たる「完全版」の邦訳であり、2016年版を底本としている。)
5. 松本妙子訳『セカンドハンドの時代』(岩波書店 2016) orig. 2013

B. アレクシエーヴィチの思想

1. スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ、鎌倉英也、徐京植、沼野恭子著『アレクシエーヴィチとの対話』(岩波書店 2021)

C. 関連書

1. アンナ・ポリトコフスカヤ著、三浦みどり訳『チェチェン やめられない戦争』

(NHK 出版 2004) orig. 2002